

五臓六腑色懺悔

校倉 元

【登場する役柄】

- 蛤……………捨吉の母
- トコヨミ／おまん／お伝……………三途の川の渡し守／腰元頭／茶屋の女房
- 天狗／頓兵衛……………捨吉の魂主／蛤の元旦那
- 甚兵衛／その他……………捨吉の腎臓「天狗の仲間」／筵など
- 新之助／その他……………捨吉の心臓「天狗の仲間」／筵など
- 胡弓／その他……………捨吉の肺臓「天狗の仲間」／筵など
- 緋牡丹／その他……………捨吉の脾臓「天狗の仲間」／筵など
- 勘太／その他……………捨吉の肝臓「天狗の仲間」／筵など
- 河童／呑兵衛……………捨吉の魂主／茶屋の亭主
- 亥之助／その他……………捨吉の胃袋「河童の仲間」／筵など
- 長十郎／その他……………捨吉の大腸「河童の仲間」／筵など
- 長五郎／その他……………捨吉の小腸「河童の仲間」／筵など
- 坊主尼／その他……………捨吉の膀胱「河童の仲間」／筵など
- 睡蓮／その他……………捨吉の膀胱「河童の仲間」／筵など
- 三笑／その他……………捨吉の三焦／筵など

上の巻

一、三途の川 六道堤

ぬめりとした血が匂う夜――。

よく耳を澄ますと、川のせせらぎが聞こえる。それに混じって、筵の擦れる音が聞こえるかもしれない。草木の音が聞こえるかもしれない。ただ、まだほとんどが混沌の中に眠っている。

やがて、闇のどこかから一筋の灯りが見えてくる。

竹竿を持った女が、それを杖にして土手を登ってくるようだ。

その女は、竿で闇のあちこちを探っている。

そのうち、なにかに当たったのか竿を搔き回し、土砂を撒き散らすように

竿を振り上げる。それに合わせて、闇の中からいくつもの筵が蠢きだす。

やがて、筵たちは薄闇の中を舞い踊り始める。——それはまるで蝙蝠のダンスだ。

砂嵐のような乱舞がおさまると、別の女がぼんやりと立っていた。

竹竿女　いま、梅干し婆アって呼んだかい？

女　いいえ。

竹竿女　じゃあ、そう呼んでごらん。

女　梅干し婆ア。

竹竿女　(女を引っ叩きなんてひどい呼び方するんだっ！

女　だってそう呼べと。

竹竿女　あたしが？

女　ええ。

竹竿女　もしそうだとしたら、とんだ付和雷同だね。

女　……………。

竹竿女　流されずにあんたの好きなように呼ぶんだよ。イチジクは、イチジクと呼ばれるずっと前からあったけど、イチジクと呼ばれて初めてイチジクになったんだ。でも、あんたがそれをチリメンって呼びたいなら、それはあんたにとつてチリメンだ。名前っていうのはそういうものさ。

女　はあ…。

竹竿女　さあ、呼んでみな。

女　いきなり言われても困ります。

竹竿女　そんなこったから自分を見失うんだ。仕方ないから、トコヨミと呼んでみな。

女　トコヨミ…。

竹竿女　もつと大きく！木霊が返らないじゃないか。

女　トコヨミ…！

筵たち　ハマグリ…！

トコヨミ…
どう？

女　あたしが呼ばれました。

トコヨミ…
あんた蛤っていうのかい？

蛤　はい。でも、なんであたしが呼ばれたのやら。

トコヨミ…
自分を見失ったあんたが水先案内を求めているのが、亡者たちにはわかるんだらうね。

蛤　亡者？ここはいったいどこなんです。

トコヨミ…
(にやりとして)黄泉と常世の境目さ。死に損なってふらふらと彷徨い込んだあんたにやあ、お誂え向きのねぐらじゃないか。寝床が欲しけりや貸してやるよ。

蛤　こんな処で寝たかありません！

トコヨミ…
自分で迷い込んだくせに、こんな処たあご挨拶だね。そんならまだふらつき

蛤 それはわかっておりますが、死に損なつた上からは、なんとか倅に巡り合い、邪険な仕打ちを謝つて、あの子と二人でもう一度、生き直してみたいんです。

トコヨミ 欲にまみれたおまえさんに、それが出来るか怪しいもんだが、そこまで言うなら手を貸してやらんでもないわな。どうかお願い致します。

トコヨミ そんなら聞くが、なにか手掛かりはあるのかい？

蛤 無残に捨てたあの頃からは、月日も流れ、顔も容も変わっておりますが、たつた一つの手掛かりは、掛けて渡したお守り袋。

トコヨミ 守り袋？

蛤 はい。欲得づくで寺まで連れて参りましたが、さすがに捨てて帰ると言えず、その場しのぎでお守りを頂き、せめてもの罪滅ぼしにと、首から掛けてやりました。

トコヨミ (鼻で笑い)それであなたの気は晴れようが、酷い仕打ちに変わりなし、罪滅ぼしが聞いてあきれれる。

蛤 返す言葉もございませんが、どうかお手を貸してくださいませ。

トコヨミ それで、どんな袋なんだい？

蛤 はい。ついでに我が身も守ろうと、その時もらつたお守り袋、(懐から袋を出して)…これと同じでございます。

トコヨミ つくづく身勝手な女だねえ。どれ、ちよつと貸してみな。(手を出し受け取り、匂いを嗅いでしげしげ眺めて)なるほど、なるほど…。うん、見えた！どこにどうして？

トコヨミ (にんまりして)知りたいかい？

蛤 はい。どうぞ教えて下さいませ。

トコヨミ (袋を蛤に返して)…眠つたまませ。

蛤 え？

トコヨミ あんたの倅は、寝たきり起きない生き止まりさ。

トコヨミ どういうことですか？

蛤 魂ふらふらフラついて、生きてはいるが眠っているのさ。

トコヨミ それはいつたい…。

蛤 まあ、自分で自分がわからんようになったんだね。身体は死んじやないけれど、魂が居場所を失つて、死んだように眠ってるんだ。

トコヨミ どういうことですか？

蛤 人の魂っていうやつは、一つだけじゃないんだよ。中でも大きな魂で、身体の方にも顔が効くのを、魂主(たまぬし)って言うんだが、それも大抵いくつかあつて、普段は互いに折り合い付けて、うまく収まるものなのさ。ところが、たまぐに二つ三つの魂主が競り合いになることがある。すると居場所を取り合つて、収まり付かなくなつちまうんだ。そうなるとうちは生きてたままなのに、眠つたままになつちまう。あんたの倅はそんなつたのさ。

蛤 そんなら巡り合つたとしても、話すことさえまならないと？

トコヨミ
まあ、あんたにその気があるのなら、元に戻らんもんでもないわさ。
蛤 どうしたらいいんでしょうか？

トコヨミ
（川の方を指し）その川を下っていくと、死に損ないの引っ掛かる淵がある。
蛤 そこに倅を流してやるから、舟に乗って胎内にお入り。
タイナイ？

トコヨミ
ああ。今の倅の身体の中さ。はたして競り合いが収まるか、切った張ったで
蛤 共倒れか、ここから先は、あんた次第だ。どっちに転ぶか知れぬ道だが、
中に入ってみる気はあるかい？

トコヨミ
はい。
蛤 そんなら船頭に伝えておくよ。その先の舟着場で待っているな。

トコヨミ
よろしくお頼み申します。

トコヨミ
（うなずき）まあ、気を付けて行くがいいや。
蛤 はい、ありがとうございます。（去る）

どこかから生ぬるい風が吹いてきて、あちこちから筵たちの声が聞こえ始める。

筵たち
おんばらばら うんばらばら
おんばらばら うんばらばら
おんばらばら うんばらばら
おんばらばら うんばらばら

筵たちの声が次第に大きくなって、呪文のように響き渡る。
それに合わせて風が舞い、トコヨミは土手の上に立つ。

トコヨミ
箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。水が引いたら舟漕ぎ出
すが、それでも越せぬは三途の川よ。三途の川にや魚も住まぬ、せめて掛
かれや泥鯱。どれ、この返を探ってみようか。

竿にて川を探る。筵たちの声が戻ってくる。

筵たち
おんばらばら うんばらばら
おんばらばら うんばらばら
おんばらばら うんばらばら
おんばらばら うんばらばら

筵たちの声、次第に大きくなって、再び呪文のように響き渡る。
菰を掛けた戸板が流れてくる。

トコヨミ
それ、掛かったか。

トコヨミ、竿にて戸板を引き上げる。
よきところで戸板の菰が落ちると、顔に白い布を掛けられて死装束を
着せられた男が張り付いている。

トコヨミ
これ、それを着るには早過ぎる。(ふっと笑って竿で戸板を押し流そうとするが、すぐ思い留まり、にんまり笑って) …どれ、その前に中の様子を見てやろう。

トコヨミ、竿を傍に置き、両手を丸めて筒のように重ね、男の身体に向けて覗き始める。——その中で、ゆっくりと暗くなっていく。

二、鳩尾平 天狗陣屋

光が戻ってくると、そこは天狗の陣屋である。

新之助が横になって緋牡丹に腰を擦らせている。

胡弓は座つてなにか読んでいる。

相変わらずひどい懲りようだね。

最近出入り続きで寝る間がないのさ。

心臓に寝られちゃお陀仏じゃないか。

馬鹿言っちゃいけないよ。心臓だって時には休むよ。

知ってるけどさ、死なない程度に頼みますよ。

こう朝から晩まで使われちゃ、腰も立たなくなっちゃまう。

(股間を軽く叩き)それでもここは立つんだらう。

違えねえ。

その元気があれば大丈夫さ。

まあとにかく揉んでくれ。さっぱりしこりが取れやしない。

はいはい。

新之助、あれこれ指図して緋牡丹に揉ませている。

(入って)新之助、また揉ませてるのか。

股じゃねえ、腰だ。

どっちでもいいが、あんまり緋牡丹ばかりに揉ませたら可愛そうだ。

こいつは脾臓だからいいのさ。飯時以外は暇なんだから。

何言ってるやがる。それは脾臓じゃねえか。いい加減憶えたらよさそうなものだ。なあ。

緋牡丹
新之助
緋牡丹
新之助
緋牡丹
新之助
緋牡丹
新之助
緋牡丹
新之助

甚兵衛
新之助
甚兵衛
新之助
甚兵衛

緋牡丹
甚兵衛

まあいいよ。今はあたしも暇だからさ。あんたも次に揉んでやろうか？
そうしてもらいたいのは山々だが、そうもしちゃいられねえのさ。天狗の
旦那がまた新しい作戦を言い渡すから揃って待てとのお達しなんだ。

新之助

こないだ変えたばかりじゃねえか。

甚兵衛

俺もそうは思うんだが、大将が言うんじゃ仕方ない。そう言えば勘太がい
ないが、どこ行ったんだ？

緋牡丹

おそらく湯にでも漬かってるんじゃないかねえ。

甚兵衛

またかよ。

緋牡丹

まあ疲れてるんだ、乱取のない時ぐらい大目に見ておやり。休肝日は大事
だって言うじゃないか。

甚兵衛

緋牡丹は勘太に甘すぎる。いくらなんでも休み過ぎだ。いつも肝心な時
にいねえじゃないか。

新之助

まあ平日に新聞の出ねえ日もあるさ。

胡弓

うまいこと言うなあ。

甚兵衛

なにがうめえんだ？

胡弓

勘太さんの休肝日はキモのカン、新聞の休刊日は刊行のカンでしょう。

甚兵衛

さっぱりわかんねえ。おめえ、わかるか？

緋牡丹

もちろんさ。

甚兵衛

くそ面白くもねえ。おい胡弓、読み書きが出来るからって威張るんじゃね
えぞ。いくさになりやあ、そんなもんなんの役にも立たねえんだ。

緋牡丹

なにも胡弓に当たるこたないじゃないか。

甚兵衛

当たつてなんかいいえよ、べらぼうめ。とにかく風呂ならすぐ呼んで来い。
大将が来た時いないとまずい。

緋牡丹

そんならちよつと…。(行きかける)

新之助

呼びに行きたきや、おめえが行け。
そりやあ行かねえもんでもないが、おまえに命令されたかねえや。

甚兵衛

なに偉そうな口叩いてやがる。腎臓は黙ってシモの処理でもしてやがれ。
なんだと。もう一度言ってみろ。

新之助

おう、何度でも言つてやらあ。このソラマメ野郎！
なに言いやがる、ハツの塩焼き！

甚兵衛

もう喧嘩はよしなつてば。いいよ、あたしが呼んでくるから。
その必要はないと思うよ。

緋牡丹

え…。
ほら、いつもの歌が向こうから…。

胡弓

ほんとだ。
(替え歌で『梅は咲いたか』を歌いつつ)お湯は、なみくなくみ、お風は
呂くはよいわいな、アチヨイナ、着替くえ忘れたくら、はだくかくでいや
しゃんせ…。(入って)あ、どうも皆さんお揃いで。

甚兵衛

お揃いじゃねえっ！いったい何度入ったら気が済むんだっ！

勘太 今日はまだ三度目でござるよ。

甚兵衛 三度も入ってんじやねえ！

勘太 一度や二度じゃ疲れも汚れも取れんのでござる。

甚兵衛 ったく、どこ擦ってんだか知れたもんじやねえや。たまには肝臓らしく肝を据えてじっとしてたらどうなんだっ！

勘太 そんなに怒鳴らんでもよござんしょう。

緋牡丹 まあ、とにかくお成りに間に合ったんだ。一安心さ。

勘太 お成り？

緋牡丹 天狗の大将様が、また作戦を変えるんだとき。

勘太 またでござるか？

緋牡丹 ああ、まったく天狗心と秋の空さ。

おまん (奥の方から声のみ)天狗様のお成り。

甚兵衛 おいつ、お成りだぞ！身支度して並べ並べ。

緋牡丹、勘太の身形を整えてやる。

甚兵衛、その様子を悔しそうに見ながら居住いを正す。

おまん (声のみ)お成り。

天狗、おまんを従えて入ってくる。

天狗 揃ったか？

甚兵衛 はいっ！

天狗 うむ。おまん。

おまん はい。

天狗 人払いして、手を鳴らすまで控えている。

おまん かしこまりました。(一礼して去る)

新之助 さて五人衆に集まってもらったのは他でもない。我が天狗一族は、これまでに様々な改革を重ねてきた。そのおかげで、昔は大き過ぎて運べなかった食糧も、分解して運搬できるようになった。しかし、これからはさらに利便性を高めて進化せねばならん。すなわち、我々自身の手で食糧や熱源を作って備蓄するのだ。そのためにも、工場の建設を含む再開発計画は、ぜひとも成し遂げねばならぬのである！

(拍手してから手を上げ)恐れながら申し上げます。

新之助 なんだ新之助。

天狗 誠に仰せごもつともで、有り難く聞かせて頂きましたが、ちよいと気掛かりなことを申し上げます。あつしには、なんだか天狗様が違ってお人になつたような気が致しましたんで。

天狗 どういうことだ。

新之助 へい。なんと申しますか、喋り方とでも言うんですかい、なんだか違う国

緋牡丹
甚兵衛

の言葉を聞いているような…。なあ、そうは思わねえか。そうだねえ、なんだか立て板に水で響きがいいが、別のお方のようだねえ。おい、失礼じゃねえか！すんません、ガサツな野郎どもで。

新之助
天狗

戦のひとつなのだ。さっぱりわけがわからねえ。いいか。新しい時代を築くには、工場の建設は言うまでもないが、我々の精神も新しくすることが肝要である。そして、新しい時代にふさわしい精神を育てるには、今までのような時代錯誤の喋り方では駄目なのだ、遅いのだ、まどろっこしいのだ！そういうわけで、今後は…（懐から書物を出し）これを手本に上等語を話してもらおう。胡弓！（胡弓を手招き、書物を渡す）

胡弓

（受け取り）え〜『新しい国語』…（開いて）「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ。 スズメ、スズメ、キタキリスズメ」

天狗

うむ。後でやつらに教えてやれ。さて、もう一つ伝えておくべき重大な作戦がある。名付けて、カッパライ作戦。

新之助
天狗

かっぱらい？こそ泥ですかい？いや、河童を払う。

甚兵衛
天狗

河童を、払うか…。うむ。いままら語るまでもないが、我々が再開発を計画している地域には、俺の支配に入ろうとせん河童どもが棲息している。奴等のように自然の恵みだけで暮らそうなどという下等な考えは、我々先進的な一族を脅かす危険思想である。自然との共生といえば聞こえはいいが、そのせいで釣鐘池の周辺には、いまだに小さな工場すら立てられずにいる。このような状況は、もはや看過することは出来ないのである！

新之助
天狗

するってえと、なんですか。早え話、河童どもを追っ払うと。まあそんなところだ。

天狗
勘太

ちよっと待って下さいやし。なんだ。

天狗
勘太

恐れながら申し上げます。かの河童ども、今でこそ数は少のうござりますが、もともとあの辺りは古くから奴らが住んでいた土地でござります。それを力づくで追い払うとなりますと、おいそれと黙って従うはずもなし、かえって事をこじらせ、ご計画が進まなくなる恐れもあろうかと。

天狗

さすが肝臓。なかなか鋭い指摘ではある。しかし、なにも武力で追い払うと言っているわけではない。

甚兵衛
天狗

いくさを仕掛けないとすりゃ、いったいどうして。河童とは水がなければ生きられぬもの。あの池を埋め立ててしまえば、水を求めて立ち退くだろう。河童は去って、工場が立つ。一石二鳥の作戦だ。

新之助
甚兵衛

なるほど、その手があったのか…。さすが天狗さん、頭の出来が違う。

天狗 もつと言つて！

甚兵衛 天狗さんは天狗の中の天狗、大天狗だ！

天狗 いいねえ、その響き。グツと来ちやうね。

勘太 恐れながら天狗様。池を埋め立てるとはいつても一仕事、手間も人手も掛かりましょう。わが方の穩健派たちも説得せねばなりません。ここはじっくり策を練るのが肝要かと。

天狗 言うにや及ぶ。

胡弓 あれ天狗さん。口調が時代に戻ってますよ。

天狗 こりゃあ、一本取られたわ（笑う）。そうだ胡弓、作戦成功の前祝いに、ひとさし舞って見せろ。

甚兵衛 そりゃあ、いいや。

天狗 ひとつ景気のいいのをやってくれ。（手を鳴らして、おまんに合図）

胡弓 それなら、新しい踊りをご披露しましょう。

緋牡丹 いいねえ、見せとくれ。

天狗 お題はなんだ。

胡弓 うかれ天狗でございます。

新之助 やんや、やんや。

おまんが天狗に酒など載った膳を出す中、胡弓の踊りが始まる。

緋牡丹は、勘太に寄り添って嬉しそうに見ている。

甚兵衛は、何度か緋牡丹を引き寄せようと試みるが、袖にされる。

そんな中、筵の幕が場面を隠していく。

続く